

里づくりはプロセスそのものが宝物 —外部とのギャップが創り出す新たな学びの可能性—

山形県北部、最上川河畔の清川の里もすっかり秋の日差しとなった。夕暮れ時が徐々に早くなる。9月に入ってモクズガニ（川ガニ）の漁期となった。川辺には、仕掛けのウキが見え隠れし、カニを獲るためのドウ（仕掛け網の一種）があちこちに仕掛けられているのがわかる。地元漁協の組合長は川漁に関する筆者の師匠でもあるが、先週あたりからサケ漁のための漁場づくりに出かけるようになっていく。冬が来る前の最後の川漁シーズンの到来が感じられる季節となった。

最上川流域の村で暮らすようになってもう7年目となる。まだまだ里の仕事には精通しえないが、里暮らしの表層だけは一応は知ってはいる、という段階に筆者も入ったと言えるだろう。当初のムラのようなモノ・コトの一つ一つに対する驚きや感動は徐々に薄まり、筆者の中でも日常化しようとしているのを感じる。「倦怠期」という地域活動者としては警戒すべき時期に来ているともいえるかもしれない。なぜなら里の地域づくり活動には日常の暮らしに対する新鮮な視点、驚き、感動が必要不可欠だからだ。

そんなこともあって新たな目線の違いをもって地域の日常に感動してくれる来訪者との交流に、筆者としても最近特に可能性を感じるようになった。地元住民と外部者とのギャップこそ地域づくりの原動力になりうると思うからだ。

先日、戸沢村角川地区の里山で間伐と間伐材を利用した東屋や木道づくりなどを行う山の整備保全活動を、東京や仙台方面など外部の方々と一緒にいった。地元のマタギや農家林家のおじさんたちは、黙々とチェーンソーを準備し、林内作業車を運転し、キマワシ、ナタ、ノコギリ、その他諸々の山道具を持参して作業を行う。木を切る、集材し運搬する、そして刻みをいれて合わせ、東屋を作ったり、木橋を作ったりした。地元住民にとってはごく日常のことで流れるように作業は進んでいく。一日の作業で森は見違えるように明るくなり、また見事なツリーハウスと木橋が出来上がった。後日、参加した外部の方からこんな感想をいただいた。「活動自体は面白かったし、目的をやり遂げたという充実感は気持ちよかった。しかしできれば、そこに至る作業一つ一つのプロセスを学べれば、もっと里の知恵や技術の深さに触れることができたのだが。」

里の住民がある目的を達成するため（ここでは森林整備）に何気なく行っている作業の一つ一つが外部者にとって魅力的なものであり地元のことを知るための学びの対象だというのだ。ということは、そうした作業プロセスの要素を一つ一つ抽出分析し、ある程度系統立てて示すことができれば、里の暮らしや仕事、知恵や技術をもっと深く知り、地域づくりに外部者を取り込んでいく活動プログラムになっていくのではないだろうか。

実はこのことは筆者が新たに取り組み始めた川漁の地域づくり活動でも日々感じていることである。地元漁師さんたちは魚を獲るという究極の目標のために、もはや日常化した作業の一つ一つをなんなくこなしているが、筆者にとっては川漁の知恵と技術を知るため

にはその一つ一つの作業工程を改めて捉え直し学んでいく必要がある。だが地元漁師さんらはそんなことを気にはしていない。あまりに当たり前のことだからだ。

このギャップこそおもしろいと筆者は思う。新たな地域づくりのための要素分析と系統立ては、地元と外部参加者の双方がいてこうしたギャップを意識することができてこそ、楽しみながら構築できるのではないだろうか。その構築の過程そのものさえもプログラムとして楽しみの対象となりうるだろう。里づくりのプログラムとはヨソモンと地元のコラボレーションで相乗的に作り出される、そんな可能性がこんなところからも感じられるのである。